

山梨県笛吹市芦川町の民家集落について —平面形式の変遷における民家の分析—

Key Word

山梨県笛吹市芦川町 茅葺民家
平面形式 イドコ

K05031

小俣友香

1. 研究背景と目的

芦川町は山梨県の山中にあり、芦川の段丘に沿って広がる集落で、茅葺の民家が多く存在し、昔ながらの風景が残る。今年度より重要伝統的建造物群保存地区候補地としての調査が正式に開始された。実測調査を行い、保存に役立てることを目的とする。

2. 研究方法

芦川町にて、現存する民家の実測調査・聞き取り調査・写真撮影を行う。それより平面図・断面図・復原平面図を作成する。昨年度も調査が行われているので、その結果との比較を行いながら、民家の特徴や平面形式の変遷を考察していく。

3. 芦川町

3-1. 位置

芦川町は甲府盆地と富士山麓との中間で、御坂山地のほぼ中央部に位置する。標高 700~1000m の芦川渓谷沿いに上芦川、新井原、中芦川、鶯宿の 4 集落が点在している。(図 1)

3-2. 生活

平地に恵まれず、山の斜面を削り石垣をつくり農業を営んできた。明治になると養蚕が盛んになった。他にも林業や、それらを盆地に売りさばく行商なども行われてきた。現在も民家の多くは農業を行っている。また平成 18 年に笛吹市に編入し、芦川村から芦川町となった。最近では高齢化が進み、町の半数以上が高齢者となっている。

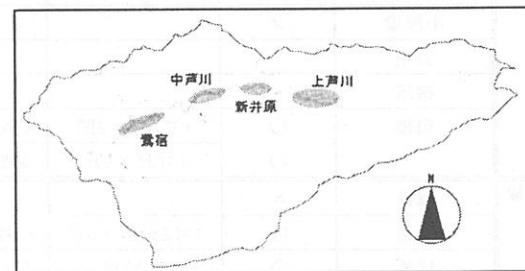


図 1 芦川町概要図

表 1 芦川町の現状

人口	計	515人
	男	240人
	女	275人
世帯数		236世帯
町域形状	東西	11km
	南北	4km
面積		37.15km ²



図 2 芦川町の風景

4. 実測調査

4-1. 調査概要

2008 年 9 月 1~3 日、9 月 10 日、11 月 7~9 日に上芦川 17 棟、中芦川 5 棟、新井原 2 棟、計 24 棟の民家の調査を行った(表 3)。

4-2. 調査対象地

上芦川は、海拔 900~1000m と芦川町の中でも高い所に位置し、面積は約 12 km²である。1 本の道路の両側に沿うように民家が立ち並んでいる。(図 3)

新井原は、海拔 830~880m に位置し、面積は約 4 km²である。昔は上芦川と同じ地域だったとされており、芦川町の中で最も小さい。芦川の北側の斜面に向かって広く民家が立ち並んでいる。(図 4)

中芦川は、海拔 800~830m に位置し、面積は約 8 km²である。新井原と同様、芦川の北側の斜面に多く民家が存在する。役場や学校等があり、芦川町の中心となっている。(図 5) また a~p の民家は昨年度調査したものである。

5. 平面形式

5-1. 基本的平面形式

民家の屋敷内には主な生活を営む主屋や、物置などの離れ等がある。主屋は全体的に似た間取りをしていて、ドマ、イドコ、ザシキ、ナンド、ダイドコ等で構成されている。大黒柱を中心として反転した 2 種類の間取りに分けられた。これは道路から民家へのアプローチの仕方によって決まることが昨年度の考察からわかっている。ここでは主に主屋の平面形式を見ていきたいと思う。

(i) 土間

土間部分は、ドマ、台所、風呂等から構成される。南側にドマ、北側に台所、南側の玄関横に風呂、という配置が多い。ドマのことはドジという場合もある。また風呂は主屋にはない場合も多い。

(ii) 居室部

居室部分はイドコ、ナンド、ザシキ等から構成される。イドコは居間のような部屋でドマ寄りに位置する。ナンドは寝室であり、ネドコとも呼ばれる。ザシキは客間であり、トコノマを設けている部屋もあるので、トコノマとも呼ばれることがある。また離座敷がある民家も見つかった。

基本的平面形式は昨年度の調査結果と同じ傾向を見ることができた。

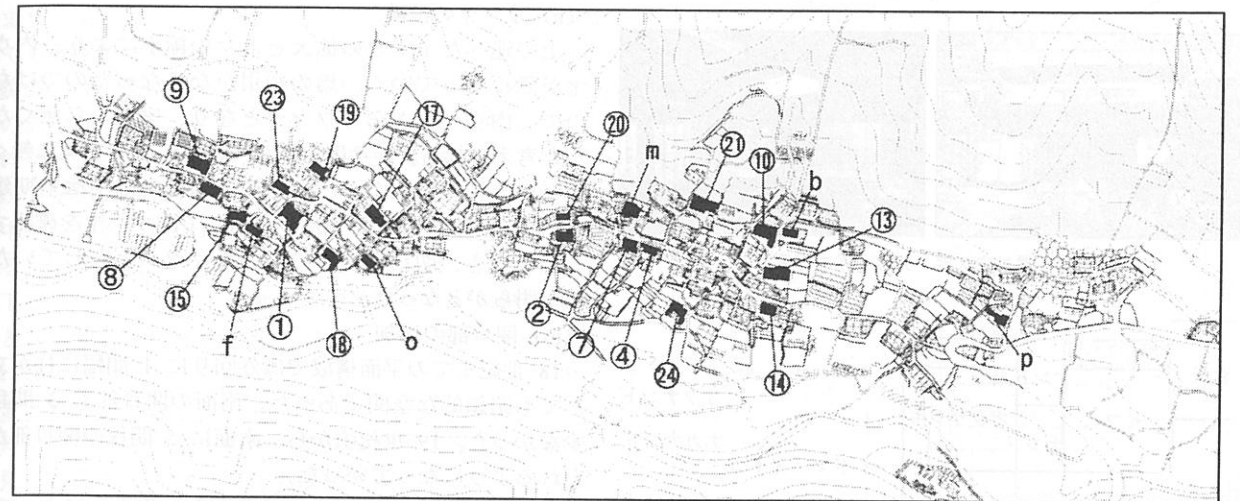


図 3 上芦川配置図

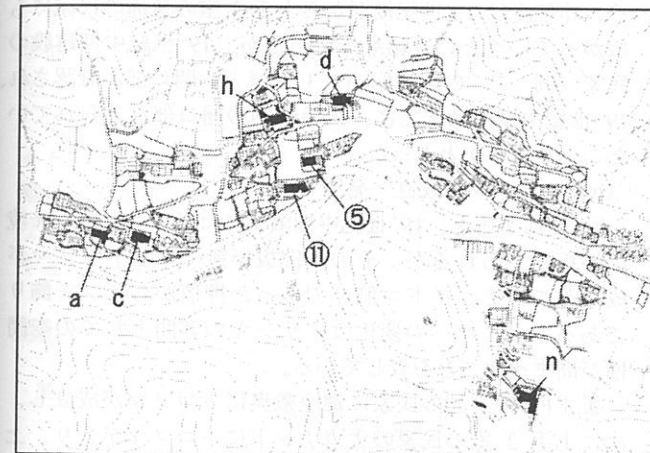


図 4 新井原配置図

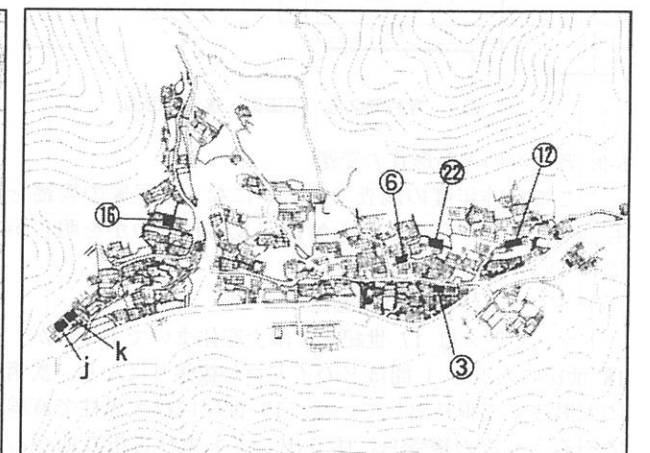


図 5 中芦川配置図

5-2. 現在の利用方法

古くからある民家で暮らしていくために、様々な改築や工夫が施されている。そこにはどのような特徴があるのかを見ていきたいと思う。

(i) 土間部分

土間部分には、現在の台所や風呂などの水廻りの設備が整えられ、増築している民家も多い。またさらに空間を確保するためにほとんどの民家で物置や工場等の離れが存在していた。

(ii) 石垣沿い部分

芦川町は山の斜面に築かれた石垣に沿って民家が並んでいる。そのため主屋から石垣に屋根をかけてその間の空間を漬物置場、ミソグラとして使用している民家が多く見られた。さらに石垣に穴を開けて貯蔵に利用している民家もあった。

(iii) 2 階部分

2 階は改築されている民家が多かったが、その他では物置や子供部屋として使用している民家がほとんどだった。物置の場合はそのままの形で使用できるが、部屋の場合は、茅葺屋根はそのまま内側から 2 階空間に箱を入れる様な形で部屋を作っていた。

6. 平面形式の変遷

6-1. 編年

まず各民家の建設年代を推定した。聞き取り調査によってわかった民家は 17 棟あり、それ以外の 7 棟は編年指標(表 2)をもとに建設年代の推定を行った。その結果、17 世紀から昭和初期にかけて建てられた民家が現存していることが明らかになった。

また痕跡より作成した復原平面図を、梁行・桁行規模によって類型化した。昨年度調査した民家も含めた計 40 棟の民家の主屋規模と建設年代による一連の流れを図 8 に示す。

6-2. 霜村守久宅

上芦川にあるこの民家は、推定建設年代が 17 世紀(江戸初期)であり、上芦川集落最古の現存民家であると推測される。現在の規模は桁行 7 間梁行 5 間、間取りは表 2 室の裏 3 室の構成であり、裏側中央に 1 間幅のナンドを設けている。当初の規模は桁行 6 間梁行 4 間、間取りは上手妻側が 3 室である。内法高が低く、全て土座であり、大変質素な空間であったと考えられる。また手斧仕上げの 4 本の柱が残っており、山梨県の古い民家にみられる四建構造であったと考えられる。

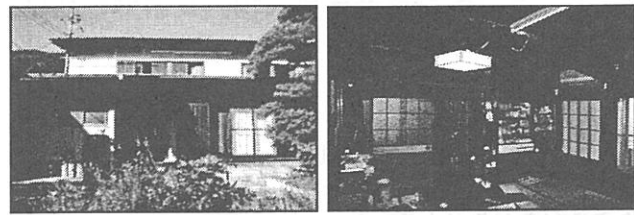


図6 霜村守久宅 外観・イマ写真

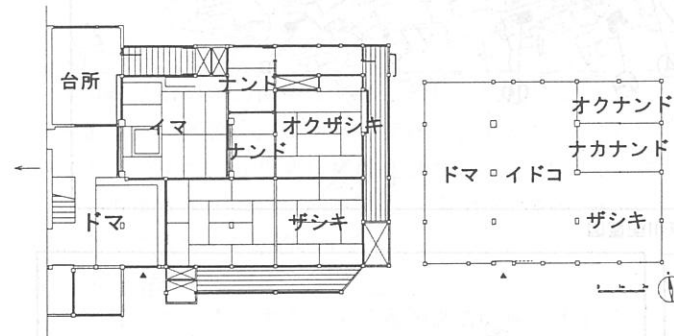


図7 霜村守久宅 平面図・復元平面図

6-3. 芦川町の平面形式の変遷

ここでは昨年度の調査で明らかになった民家の変遷をもとに、さらにどのような特徴が見られるのかを明らかにしていきたいと思う。

(i) ドマ・イドコの発展過程

ドマ、イドコは17世紀までは土座住まいであったが、18世紀に入ると1間ほどのイドコが板張りになり、次第に大黒柱まで張り出していく。19世紀には大黒柱で直線にそろそろ。その後さらに張り出して大黒柱で折り曲がった鍵型のイドコとなり、妻面までイドコが通る。またイドコが拡大していく中で、板張りから畳敷きになっていく。イドコはさらに梁行2室に分かれ、妻側まで張り出したイドコは3室に分かれる。生活空間拡大に伴い、広いイドコが機能的に分室されていった。これは昨年度の調査と同じ傾向を見ることができた。

表3 実測調査結果

名称	地域	建立年代	本家・分家	当初規模(間)		大黒柱	側柱高(尺・寸)	2階床面から	前		後	
				梁行	梁行	通し柱			折置組	梁下げ・桁上げ(尺)	折置組	梁下げ・桁上げ(尺)
1 霜村守久	上芦川	17世紀(江戸初期)	本家	6	4	×	290 x 230	〇	見えず	-	-	-
2 原輝男	上芦川	18世紀初期	本家	6	3.5	〇(切断)	330 x 280	×	10.9	10.4	〇	桁上げ 2.5
3 渡辺甲雄	中芦川	18世紀中期	本家	6.5	3.5	×	250 x 220	〇	11.3	14.1	〇	桁上げ 1.9
4 原正徳	上芦川	18世紀後期	本家	6.5	4.5	×	380 x 280	×	12	12.1	×	梁下げ 2.1
5 丸山和雄	新井原	19世紀初期	分家	5.5	3.5	〇	270 x 250	×	8.2	9.1	〇	×
6 声沢義男	中芦川	19世紀初期～中期	本家	6.5	3.5	×	320 x 270	×	11.5	10.6	×	梁下げ 2.7
7 原吾朗	上芦川	19世紀中期	本家	6	4	×	310 x 140	〇	10.1	11.5	〇	桁上げ 1.2
8 霜村昭五	上芦川	幕末～明治期	隠居分家	6	3.5	×	290 x 230	×	-	10.7	-	-
9 市川正彦	上芦川	幕末～明治期	本家	7.5	4	×	320 x 290	×	11.2	6.8	-	-
10 霜村安雄	上芦川	幕末～明治期	本家	7	5	×	285 x 270	×	9.1	10.7	〇	×
11 丸山幸	新井原	幕末～明治期	本家	6	4	×	310 x 340	〇	7.6	12.3	-	-
12 旧大塚正三	中芦川	明治中期	分家	6.5	4	×	300 x 250	×	12.1	10	×	×
13 原金治	上芦川	明治中期	本家	6	4.5	×	320 x 260	〇	10.6	9.8	×	桁上げ 1.4
14 市川幸男	上芦川	明治26年	本家	7	4.5	×	330 x 280	〇	10.8	13.8	×	桁上げ 1.8
15 霜村好秀	上芦川	明治29年	分家	6.5	3	×	250 x 220	〇	10.4	8.1	×	×
16 小林今朝則	中芦川	明治29年	分家	7	5	×	350 x 290	×	13.1	14.9	×	梁下げ 2.9
17 市川多美恵	上芦川	明治31年	分家	7	4.5	×	350 x 270	×	12.7	6.9	-	-
18 霜村千代晴	上芦川	明治32年	本家	7.5	4	×	325 x 265	×	11.7	10.9	×	×
19 市川邦忠	上芦川	明治38年	本家	7	4.5	×	315 x 265	×	11.1	13.3	-	-
20 市川美邦	上芦川	明治41年	分家	7	4	×	385 x 315	×	11.1	12.2	×	梁下げ 1.3
21 原百枝	上芦川	大正4年	本家	6	4.5	見えず	320 x 140	-	-	-	見えず	-
22 石田清子	中芦川	大正期	本家	7	3.5	×	320 x 240	×	11.1	10	×	桁上げ 2
23 市川啓一	上芦川	大正末期～昭和初期	分家	6	3	×	280 x 250	〇	12.4	10.4	×	×
24 霜村保正	上芦川	昭和元年	分家	6	4	×	240 x 190	〇	-	-	-	-

(ii) ウマヤの消滅

上で述べたイドコの拡大とドマの縮小により、内ウマヤが無くなっていく。馬の利用がなくなったのではないので、内ウマヤから外ウマヤとなり、室内から無くなったと考えられる。昨年度の調査では19世紀を境に無くなるという結果が出たが、今年度の調査では明治中期建設、明治26年建設の民家(例:13,14)で内ウマヤを確認することができ、明治期前半にも内ウマヤが存在していたことが明らかとなった。

(iii) 開口部の増加

18世紀までの平面構成では外回りに1間幅に柱が立つとても閉鎖的な空間であった。南面の開口部も3間程と少なかった。19世紀頃から、南面に5間程の開口部がとられるようになっていった。

さらに上手妻側にも開口部がとられるようになっていく。昨年度は19世紀後期から上手3室の普通の民家にも広がっていくという結果であったが、19世紀中期建設の民家(例:7)で上手妻側に3間ほどの開口部が確認され、19世紀中期にはすでに、上手妻側の開口部がとられていたことが明らかとなった。

(iv) トコノマの成立・発展

図8によると、19世紀中期頃まではイドコ・ザシキ境に押板が見られるが、その後押板が無くなりトコノマが成立していく。イドコ飾りであった押板からザシキ飾りであるトコノマへの変化は、ザシキの客間としての空間性が高まったことを表している。

まず桁行3列の民家に鍵座敷奥にトコノマが成立し、次に上手3室の民家のナカナンドにトコノマが入り、上手2室の民家にも続き座敷、平座敷共にトコノマが成立していく。

表2 編年指標

年代	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀
柱	1間ごと	2間ごと	3間ごと	4間ごと
側柱高	8～10尺	10～12尺	12～14尺	14～16尺
梁	立体的な梁	一面に平らな梁	一面に平らな梁	一面に平らな梁
屋根形式	切妻・入母屋・寄棟	切妻・入母屋・寄棟	切妻・入母屋・寄棟	切妻・入母屋・寄棟
下屋	上屋・下屋の区別が明確	上屋・下屋の区別が曖昧	上屋・下屋の区別が曖昧	上屋・下屋の区別が曖昧
梁下げ・桁上げ	なし	なし	一階民家を二階民家へ	一階民家を二階民家へ
上二階高	5尺	6尺	6尺	6尺
部材	手すり上げ	手すり上げ	手すり上げ	手すり上げ
部材	手すり上げ	手すり上げ	手すり上げ	手すり上げ

また分家にはトコノマがないのが一般的で、昨年度の調査でも分家にはトコノマが見られなかった。しかし今年度の調査では分家にもトコノマが発見された(例:8,12,23)。この部屋はトコノマ付きの立派なオクザシキであり、ナンドのかわりの寝室空間であったと考えられる。

6-4. 中芦川の特徴

中芦川地区は他の地域と比べて平面形式に違いが見られる。土間部分が他の地域より広くとられている。時代が下ってもイドコは下手妻側まで伸びきらず、鍵形のドマとなっており、北側がダイドコとなっているものが見られた。

7. まとめ

芦川町の現在の基本的平面形式は昨年度と同様の傾向を見ることができた。現在も改築や様々な工夫をして古い民家を利用し続けていることがわかった。

また上芦川最古の現存民家とされる霜村守久宅の発見により、民家の変化の過程を17世紀まで遡ることができた。

平面形式の変遷は土座住まいで閉鎖的な平面構成から、イドコの拡大分室、内ウマヤの消滅、トコノマの成立、開口部の増加により、イドコが広く開口部の多い開放的な空間となっていく。また中芦川には他の地域とはやや違った特徴が見られた。

参考文献

- ・「芦川村誌」上・下巻 芦川村誌編集委員会(1992)
- ・関口欣也「山梨県の民家」
- ・山梨県教育委員会編、第一法規(1982)
- ・山川梨絵「山梨県笛吹市芦川町の茅葺民家集落」
- ・配置形態および平面形式による民家の分析
- ・2007年度芝浦工業大学卒業論文
- ・野入六希「山梨県笛吹市芦川町の茅葺民家集落」
- ・屋根形態および架橋方式による民家の分析

同上 他

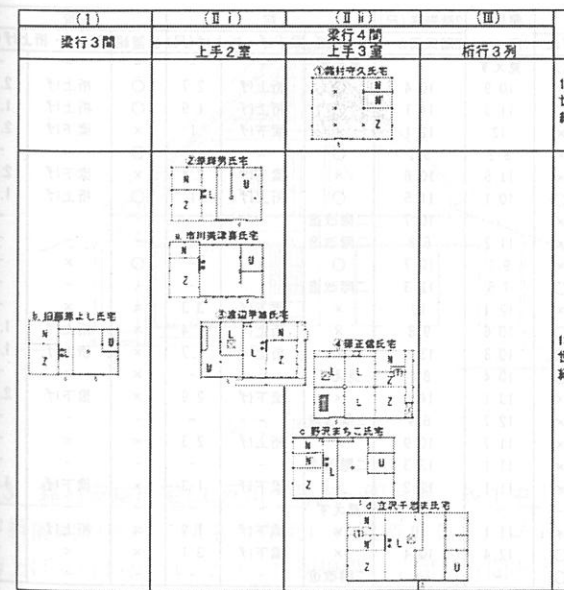


図8 平面形式の変遷

